

バルザックにおける『キリストにならいて』

——『現代史の裏面』を中心に——

大須賀 沙 織

はじめに

『キリストにならいて』（ラテン語：*De imitatione Christi*、フランス語：*L'Imitation de Jésus-Christ*）は、14世紀末から15世紀の間に中世ヨーロッパの修道院で成立した霊的修練の書である。「霊的生活に役立つ忠告」、「内的生活に関する忠告」、「内的慰めについて」、「聖体の秘跡について：聖体拝領への敬虔な勧告」の4巻からなり⁽¹⁾、この世のはかなさと人生の悲惨を思い、世を避け、孤独と沈黙を愛し、キリストとの内的対話と交わりの中で完徳の道を歩むことを説いた作品である。中世の打ち続く戦乱、ペスト、天災の時代に、死を思い、世の終わりを思う緊迫感の中で、本書は修道士のみならず、一般の人々にも広く読まれた。このような特殊な書が、西欧キリスト教世界では聖書に次いで読み継がれ、日本でも16世紀のキリシタンの時代から翻訳されて、『方丈記』や『平家物語』の無常観の心性ともつながるからであろうか、まずはキリスト信徒に受け入れられ、やがては広く一般読者を獲得してきた作品であるということに、本書の不思議な魅力と浸透力を感じずにはいられない。19世紀フランスの小説家オノレ・ド・バルザック（1799-1850）においても、本書は私生活において、またいくつかの作品において、特別な役割を果たしている。本論ではまず、『キリストにならいて』の翻訳、出版事情と著者をめぐる議論を概観し、その後、バルザックとこの書の関係、ハンスカ夫人との交流、『現代史の裏面』における役割、福音書と結びつけられた思想、という観点から考察する。

1. 『キリストにならいて』の流布と著者について⁽²⁾

『キリストにならいて』は1420年代からラテン語写本が作られはじめ、手写本が300種以上、印刷本が2000種以上と言われ、フランスでは1488年に初めての仏訳本が出て以来、100種もの翻訳が出版されてきた⁽³⁾。なかでも、ピエール・コルネイユ、ルメートル・ド・サシー、フェリシテ・ド・ラムネーによる翻訳がよく知られ、今日まで再版が続いている。

本書の著者については、今日にいたるまで議論されてきた。19世紀フランスでは、パリ大学総長ジャン・ジェルソン（1363-1429）、ケルンのアウグスティヌス修道会修道士トマス・ア・ケンピス（1380頃-1471）、イタリア・ヴェルチェーリのベネディクト会大修道院長ジョヴァンニ・ジェ

ルセン（生没年不詳）との間で議論が分かれてきたが⁽⁴⁾、特定化が困難なことから、人はしばしば著者を聖霊に帰することで満足してきた。19世紀の歴史家ジュール・ミシュレ（1798-1874）はその『フランス史』の中で、フランソワ・ド・サール（1567-1622）が『キリストにならいて』の著者は誰かという質問に対し、「聖霊です」と答えたというエピソードを共感とともに紹介しており⁽⁵⁾、『キリストにならいて』の訳者であるピエール・コルネイユ（1606-1684）も、その序文の中で、著者は「聖霊の照明を受けた人物である」と述べるにとどめている⁽⁶⁾。同じく訳者であるルメートル・ド・サシー（1613-1684）もまた、著者の特定化を避け、ただ『ヨブ記』の著者について「それは聖霊の作品である」と語ったというグレゴリウス1世を喚起するにとどめている⁽⁷⁾。

バルザックは1838年のハンスカ夫人への書簡で、そのとき構想中の作品が「『キリストにならいて』のように匿名であることを望みます」⁽⁸⁾と記す一方、1840年代前半の『現代史の裏面』第一部では、パリ大学総長ジャン・ジェルソンを著者とみなし、こう書いている。「教会がジェルソンを列聖しなかったというのは奇妙なことである。なぜなら、聖霊が明らかに彼の筆を突き動かしているからである」⁽⁹⁾。たしかに、19世紀前半には、ジャン・ジェルソンに軍配をあげる論文が多く発表され、バルザックもその見方に与していたことがわかる。

その後、20世紀に入って、トマス・ア・ケンピスの署名入り写本がベルギーのイエズス会修道院で発見されたことから、議論は決着したかに見えたが、その後さらに、1921年にドイツのリューベック市立図書館で新たな古写本が見つかり、真の著者はオランダで「新しい信心」(*Devotio moderna*) 運動を行ったヘラルト・フローテ (Gerhard Groot, 1340-1384) であるという説が提示された。トマス・ア・ケンピスは「新しい信心」運動の流れに属しており、フローテのオランダ語原文をラテン語に訳し、加筆編纂したものであろうという見方である⁽¹⁰⁾。

フローテとトマスが本書の成立にとりわけ深く関わった可能性は高いにせよ、中世キリスト教世界の霊的革新運動の中で生まれ、継承された教えを集大成したものが『キリストにならいて』という作品であったのだろう。先にも挙げたミシュレは、12歳で本書に出会い、少年期の愛読書としていたが、その著者については、先に記した、聖霊に帰する聖フランソワのエピソードを紹介するほか、「中断されたり、再開されたりしながら徐々に形成され、中世の修道生活がそのもっとも深遠な思想と、もっとも栄光に満ちた建造物としてわれわれに残した集団著作物である」とする歴史家ジャン＝ジャック・アンペール（1800-1864）の見解を引用し、友人であるアンペールとの意見の一致を喜んでいる⁽¹¹⁾。たしかに、『キリストにならいて』は中世修道精神の集団的結実であり、グレゴリオ聖歌の作曲者たちが名前を残さなかったように、中世の修道士たちが自分の名を「著者」として書き記すことなど考えず、靈感の源をすべて「聖霊」の賜物としていた彼らの精神性、「匿名」の意味を思わずにはいられない⁽¹²⁾。

1470年頃から印刷の始まった『キリストにならいて』は、日本にもイエズス会士たちによって

ラテン語版とスペイン語版がもたらされ、1596年にローマ字表記による和訳本 *Contemptus mundi* が天草で、慶長元年(1610年)にはひらがなとわずかな漢字による『こんてむつすむん地』(*mundi*が「この世」を表すことから、音の重なる「地」が使われたと見られている)が京都で出版された。ローマ字本と国字本とでは「文体が異り、後者の方がより洗練されてはゐるが、いづれも日本の吉利支丹文学の白眉と称せられるほどすぐれた翻訳である」⁽¹³⁾と言われている。タイトルの *Contemptus mundi* は、第一巻第一章の章題「キリストにならい、すべてこの世の空しいものを軽んずべきことについて」(*De imitatione Christi et contemptu omnium vanitatum mundi*)の後半部分から取られている。決まったタイトルがあったわけではない本書は、「最初の章題からとって、或はコンテムツス・ムンヂ、或はイミタチオ・クリスティと呼」ばれ、「十六世紀中頃以後、スペイン、ポルトガルでは書名を専らこの名 [*Contemptus mundi*] で呼んでゐた」という⁽¹⁴⁾。キリシタン版が「イミタチオ・クリスティ」ではなく、「コンテムツス・ムンヂ」をタイトルに採用したことについては、尾原悟氏が指摘するとおり、スペイン、ポルトガルの慣例にならったということのほか、この世を蔑すること、という「一見厭世的で無常観をただよわせる表題は、当時の日本人の心情と感性に何かマッチしたものがあつた」⁽¹⁵⁾のだろう。

イエズス会創設者、イグナチオ・デ・ロヨラ(1491-1556)は、「新しい信心」運動と本書の影響を強く受けており、イエズス会修道院では食事の際に『キリストにならいて』が朗読されたりと、イエズス会における本書の重要性が見て取れる⁽¹⁶⁾。1549年、日本に上陸したフランシスコ・ザビエルもこの書を携帯していたのではと推測されるが、記録として残っているのは、1556年に来日した視察団が大量の書物を持ち込み、その目録に含まれていたのが最初とされている⁽¹⁷⁾。イエズス会士たちは日本で宣教に当たり、『イミタチオ』を公教要理本 *Doctrina Christiana* 『どちりいなきりしたん』(1591)に次ぐ必読書とみなし、いち早く翻訳に取りかかったのである⁽¹⁸⁾。細川ガラシャ(1563-1600)は、印刷される以前の写本の段階で司祭たちから贈られ、愛読して心の支えとし、侍女たちに読み聞かせていたと伝えられている⁽¹⁹⁾。その後、禁教、鎖国の時代を経て、明治以降、カトリック、プロテスタント両派から翻訳が次々となされ、19世紀末から今日まで、20を超える日本語の翻訳が出版されている⁽²⁰⁾。

2. 『キリストにならいて』：バルザックとハンスカ夫人をつなぐ心の書

バルザックの『キリストにならいて』への言及が見られるのは、バルザック34歳、1833年のハンスカ夫人への書簡においてである。のちのバルザック夫人となるハンスカ夫人とバルザックとの文通は1832年に始まるが、それから間もない1833年1月末、『田舎医者』執筆中のバルザックは、『キリストにならいて』を思い描きながら、ハンスカ夫人にこう書き送っている。「今私は、実に福音書的な作品、私には詩的に描かれた『キリストにならいて』とも思われる作品を仕上げています。」この手紙を読んだハンスカ夫人は、この書をバルザックに贈ることを思いつく。思いが

けない贈り物を受け取り、心打たれたバルザックはこう書き送る。

たしかに私たちの間には何かよき霊が存在するにちがひありません。なぜなら、私が日夜一冊の本の仕事をし、この本の中に『キリストにならいて』の精神を、現代文明の欲するところに適合させながら、劇化しようとしているとき、あなたが私のもとに『キリストにならいて』を送り届けようとする、そのことをどう説明したらよいのでしょうか。私が行為における瞑想的詩作品を作ろうと考えているとき、どうしてあなたは私のもとにこの書を送ろうという考えを抱くことになったのでしょうか。空間を越えて、この聖なる一冊は、さまざまな優しい思いを伴って私のもとにやってきました。そして私を宗教的思想の甘美な領域に放り込みました。倦み疲れ、このすばらしい愛徳の作品、私の努力が無駄でなかったとしたら、好結果をもたらすはずのこの作品を仕上げる望みを失っているとき、この一冊が私のもとにもたらされたのです。(LH, 1833/2/24)

ハンスカ夫人から受け取ったこの一冊がどの版であったのかは不明であり、また、それ以前のバルザックがどの版で読んでいたか、『田舎医者』執筆時、バルザックの手元に『キリストにならいて』があったかどうか不明である。聖書に次いで読まれていた書であるから、両親の本棚や、バルザックの通ったオラトリオ会ヴァンドーム中学の図書室にもいずれかの版が置いてあったであろうし、この図書室の質量ともに豊かな蔵書を享受し、昏睡状態に陥るほど読書に没頭した少年であったバルザックは、早い時期にこの書に触れていただろうと推測される。さらに1820年には、J.-B.-M. ジャンスとウジェーヌ・ジュヌードによる新訳がそれぞれ出版され、1824年にはラムネーによる新訳が出版されていることから、新たに注意を喚起されていたことと思われる。

1833年、『田舎医者』執筆期のバルザックは、ハンスカ夫人との文通の開始と重なるように神秘的傾向を強め、神秘思想書を収集し、耽読する中で、『セラフィタ』を着想する。ハンスカ夫人に捧げられた『セラフィタ』は、スウェーデンボルグの神秘思想を軸に、バルザックの宗教的感情が投入された作品であるが、ここにも『キリストにならいて』の反映が見られる。そもそも主人公のセラフィタ＝セラフィトゥスが、ほとんど外出することもなく、「初期キリスト教の隠者たちが習慣としていた神秘的瞑想状態」(CH, t. XI, p. 787)に身を置いて日々を過ごしている人物である⁽²¹⁾。第6章「天国に至る道」で、セラフィタは自らの死を目前にして、『キリストにならいて』(L'Imitation と略)⁽²²⁾と重なる数々の教えを二人の友に与える。L'Imitation において、ペテロの第一の書簡(2章11節)をもとに、自らを地上における異邦人、旅人、巡礼者、追放者とみなすこと(1巻17章、2巻1章、3巻53章)が繰り返し説かれているように、セラフィタは自らを「天を離れた追放者のようなもの」とみなし、不平をいわず、「追放の状態」に生きる徳を教えている(p. 746, 849)。L'Imitation において「孤独と沈黙」は、神が人に近づくときに必

要な二つの状態であり、この状態に身を置くよう勧められているが（1巻20章）、セラフィタもまた、「沈黙と孤独という星のきらめく草原は、霊界の前庭」であり、「孤独は人を神に近付けます」（p.844, 845）と言う。*L'Imitation*の「イエスはあらゆるものを越えて、一人愛されることを望まれる」（2巻7章）という言葉は、セラフィタの「神は自分のためだけに探し求められることを望みます。その意味で、神は嫉妬深いのです」（p.843）という言葉と通じ合う。*L'Imitation*は「すべてを与え、自分自身をも与えることを欲する神」を讃えるが（1巻7章）、セラフィタも「創造物の渴きをたえず癒すことができ」、「ご自分のすべてを与えて下さる神」への愛を表明している（p.842）。*L'Imitation*でキリストが、彼のために始めた仕事において勇気を失わないよう信者を励ましているように（3巻47章）、セラフィタも「あなた方が野心的な目的でしてきたことを神のためにしなさい」と説いている（p.843）。このように、自己を捨てること、孤独と沈黙、神への愛、神に仕えることについて、セラフィタの教えには中世の修道書の思想が流れ込んでいるのである。

『キリストにならいて』は、1833年にハンスカ夫人からバルザックに贈られただけでなく、1842年に今度はバルザックからハンスカ夫人の娘であるハンナに贈られた書物でもあった。バルザックが選んだのは「（黒モロッコ革で装丁され、象牙細工で受難の図がかたどられた）豪華な一冊」であり、この一冊はロヴァンジュール文庫に保存されている⁽²³⁾。

『人間喜劇』において、『キリストにならいて』が登場する場面を見ておくと、『続女性研究（『グランド・ブルテージュ奇譚』）（1832）では、瀕死のメレ夫人の枕元に置かれており⁽²⁴⁾、『従妹ベット』（1846-1847）では、夫の帰りを待つユロ夫人を支える書として触れられている⁽²⁵⁾。『現代史の裏面』と同時期の1843年から1847年に書かれた『プチ・ブルジョワ』（未完）では、敬虔な娘モデストは、婚約者フェリックスが理神論者であることを悲しみ、『キリストにならいて』を読んでもくれるよう懇願する。その後フェリックスはモデストが泣いていると聞き、この本を熟読するつもりだと伝えさせる⁽²⁶⁾。『キリストにならいて』がハンスカ夫人から贈られた書であったこと、『プチ・ブルジョワ』がハンスカ夫人に捧げられる予定の作品であったこと、さらには、バルザックとハンスカ夫人は互いの信仰をめぐる論争も乗り越えてきたことなどから、この部分はバルザックとハンスカ夫人にとって、さまざまな記憶を喚起させる意味深い箇所であったことだろう。

3. 『現代史の裏面』における『キリストにならいて』

このように、30代から最晩年までのバルザックにとって、『キリストにならいて』は特別な役割を果たすのであるが、この書が物語の精神として掲げられるのは『現代史の裏面』においてである。

『現代史の裏面』は、第一部「ラ・シャントリー夫人」が1842～1844年、第二部「新会員」が

1846～1847年に執筆され、第二部は1848年8月～9月に新聞連載され、バルザック生前最後の作品、いわば「遺言」⁽²⁷⁾となった作品である。1842年にハンスカ夫人の夫、ハンスキ氏が亡くなったことにより、ハンスカ夫人との結婚に向けて慌しく動き出す時期であり、第二部はウクライナのハンスカ夫人の城館で書かれている。バルザックはこの作品を〈パリ生活情景〉の末尾に配置し、「腐敗した首都のただなかにある美德と宗教と善行の行為」を描くことを企図した。〈パリ生活情景〉を「快樂のための」秘密結社を描いた『十三人組物語』で始めたとする、「愛徳のために作られた会」を描いた『現代史の裏面』で終わらせることを望んだのである⁽²⁸⁾。

『現代史の裏面』では「慈善事業」が中心テーマとして描かれるが、バルザックは1830年に『慈善家』(*Le Bienfaiteur*) というタイトルの戯曲を構想していたりと、早くからこのテーマに関心を寄せていた。また、この時期は、パリの貧困、悲惨を前にいくつかの慈善団体が誕生した時期でもあった。1832年には、破産や病気などで困難に陥った人々を救済する「慈善事業団」(*Euvre de la Miséricorde*) が、1833年には、フレデリック・オザナム (1813-1853) ら法学部学生8人によって、パリの貧者や病人の救済のため「聖ヴァンサン・ド・ポール会」(*Société de Saint-Vincent-de-Paul*) が設立されている⁽²⁹⁾。

『現代史の裏面』はパリにおける慈善事業の物語であるが、田舎での慈善事業を描いた作品には『田舎医者』(1832-1833) と『村の司祭』(1837-1845) がある。とくに『田舎医者』は「行動する福音書」(*l'Evangile en action*) が体現された作品で⁽³⁰⁾、『現代史の裏面』執筆に当たって念頭に置かれており、『現代史の裏面』は『田舎医者』の「ライバル」(*LH*, 1841/9/30) として構想され、第二部「新会員」では、ベナシス医師の偉業がパリの自分たちの事業のモデルとなっていることが登場人物アランの口から語られている (*CH*, t. VIII, p. 327)。

物語は1836年9月、年の頃30ほどの男がセーヌ河岸の手すりにもたれて、ぼんやりとあたりを眺めているところから始まる。この青年、ゴドフロワは、職業に失敗し、借金を背負い、人生を仕切り直すために引越しを考えていたところ、「聖職者向け貸間、[...] ノートルダム寺院わきシャノワネス通り」という広告を見つける。そこには、女主人ラ・シャントリー夫人と四人の老人(ヴェーズ神父、元憲兵大佐ニコラ、元パリ控訴院評定官ジョゼフ、小市民アラン) が住んでいたが、彼らはみな大革命の嵐に翻弄された人物たちであった。彼らは修道者のような沈黙と祈りと読書の日々を送りながら、パリのさまざまな不幸の中にある人々、とりわけ、貧苦に陥った惨めさを隠すためもっとも発見しにくい上流市民階級の悲惨に対し、救いの手を差し伸べる事業を密かにやっている。彼らはみな『キリストにならいて』を每日一章ずつ読んでおり、その様子はたとえば、ゴドフロワがアランの部屋を訪ねるたびに、老人がこの書を読んでいる、これから読もうとしている姿からも窺える (t. VIII, p. 257)。女主人ラ・シャントリー夫人が、入居してきたゴドフロワにまずはじめに差し出し、毎日読むように勧めるのも、やはりこの書である。

これは、魂の病を治す偉大な先生の処方箋です。私たちの期待するような幸福が日常生活の事柄から与えられなかった場合には、より高次の生の中に幸福を求めなければなりません。そしてこれが、新たな世界への鍵なのです。朝晩、この本を一章ずつお読みになってください。最大の注意を払って、外国語のお勉強でもなさるように、言葉に気を付けてお読みくださいませ。ひと月後にはまったく違う人間になっていることでしょう。私は20年来毎日一章ずつ読んでいますが、私の三人のお友だち、ニコラさん、アランさん、ジョゼフさんも、寝たり起きたりするのを忘れないように、この習慣を欠かさず行っていらっしゃいます。神への愛のために、そして私への愛のために、あなたもあの方々のまねをなさってくださいね。(t. VIII, p. 245)

ゴドフロワが本を裏返し、背表紙を見ると、「金文字で『キリストにならいて』」とある。ラ・シャントリー夫人は自分の本をゴドフロワに贈り、自分用に一冊買ってきてくれるようにと頼む。かつてのダンディ、ゴドフロワはラ・シャントリー夫人のあまりの純真さに困惑して部屋に帰り、テーブルに本を投げ出すが、頻繁に読まれる本がそうであるように、とあるページで開かれ、ゴドフロワは何気なく「十二章 聖なる十字架への王道について」という章タイトルを読み、「この美しい章の文章が、燃えさかる炎のように彼の視線を捉え」、全体に目を走らせる。

彼 [イエス] は十字架を担って汝の先を歩き、汝のために死んだ。それは、汝が汝の十字架を担い、十字架上で死ぬことを欲するためである。

汝が望むところに行き、思うがままに探求を重ねようとも、〈聖なる十字架の道〉ほど高く、たしかな道は見つからないであろう。

すべてのことを欲するまま、意図するままに整え、調整しようとも、汝が欲するか否かにかかわらず、常に何らかの苦しみに巻き込まれ、かくして、汝は常に十字架を見出すであろう。なぜなら、汝は体には痛みを感じ、精神には苦しみを被らずにはいられないであろうから。

あるときは神に見捨てられ、あるときは人々から苦勞をかけられることもある。さらにはまた、いかなる治療法によっても解放されず、いかなる慰めによっても心は軽くならず、自分自身に煩わされることもたびたびであろう。神の御旨によってその状態に終わりが来るまで、汝は苦しむことを強られるであろう。なぜなら神は、汝がわが身を留保なく神に委ね、苦難をとおしてより謙遜になるため、慰めなしに苦しむことを汝が学ぶことを望み給うからである。

「何という本だろう」と、この章のページを繰りながら、彼はつぶやいた。そして次の言葉に目をとめた。

イエス・キリストへの愛のゆえに、悲嘆も快いものに思われ、それを好んで味わえるようになれば、そのときこそ幸せに思うがよい。なぜなら、汝はこの世で天国を見つけたのだから。(CH, t. VIII, p. 246-247)

この素朴さと、素朴なものがもつ力強さに苛立たされ、この本に打ちのめされたことに腹を立てて本を閉じると、表紙の緑色のモロッコ革に金文字で「永遠なるもののみを求めよ」という言葉が刻まれているのが目に入り、「で、あの人たちはそれをここで見つけたのだろうか!…」と自問する。

バルザックはここで『キリストにならいて』第2巻「内なることに関するすすめ」の最終章、第12章の2、3、4、11節を抜き出している。この引用と当時の出版状況を見ると、バルザックが使用しているのは「ゴヌリュエ版」といわれる版であることが確認できる。句読点の変更や若干の語の修正は見られるものの、ゴヌリュエからのほぼ忠実な引用である。「永遠なるもののみを求めよ」という銘句は第3巻冒頭の口絵に添えられており(図1)、版によっては表紙に刻んだものもあったか、あるいはバルザックによる書き換えであろう。

1712年に初版が出版されたゴヌリュエ版とされる翻訳は、実のところ、印刷業者ジャン・キュッ

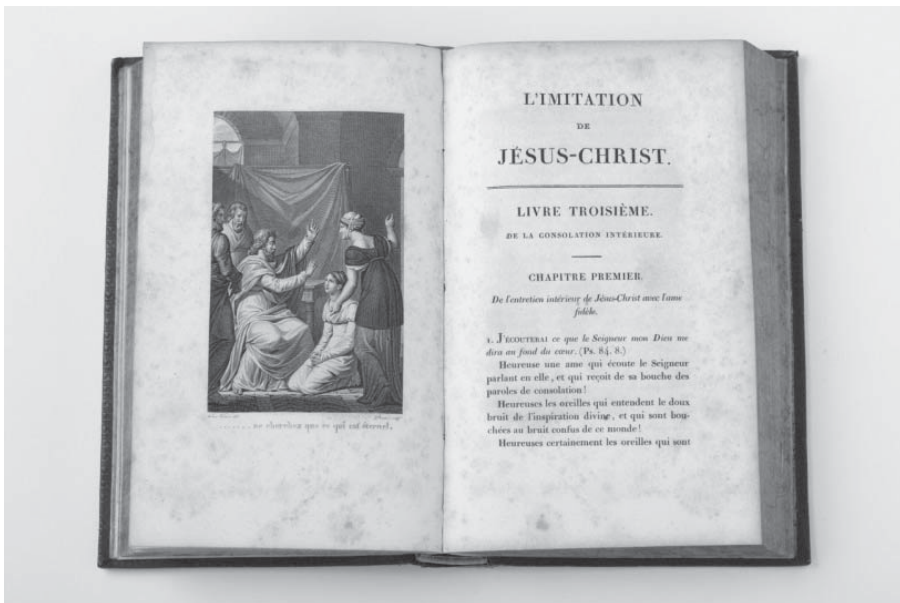


図1

ソンが翻訳し、息子のジャン＝バティスト・キュッソンが手を加え完成させたものであり、サシーに多く負っているとされる。各章の終わりに「実践」と「祈り」が挿入されており、これがゴヌリュエ神父によるものである。この版は、ピエール・コルネイユによる韻文訳（1651年、ラテン語テキストを欄外に含む）、ルメートル・ド・サシーがド・ブイユの偽名で出版した説明的言い換えによる翻訳（1662年）、ラルモンの素朴で正確な翻訳（1740年）とともに、18～19世紀にかけて再版を重ねた。また、1810年から1830年にかけて、この書の新訳が複数出版されている。ジャン＝バティスト＝モDESTO・ジャンスによる長年の研究の成果である翻訳（1820年）、ウジェーヌ・ジュヌードによる当時大成功を博した翻訳（1820年）、そして今日までもっとも多く再版され続けているフェリシテ・ド・ラムネー訳（1824年）などである。このように、15世紀から読み継がれてきた『キリストにならいて』は、19世紀前半に豪華版や新訳の相次ぐ出版によって一つの盛り上がりを見せ、バルザックはゴヌリュエ訳を取り上げて、その潮流の一面を作品の中に記したのである。

バルザックは複数の版を知っていたであろうが、『現代史の裏面』で決定的役割を果たすのがゴヌリュエ版である。おそらくこれがハンスカ夫人から贈られた版であったのだろうか。ルイ・ジャネ出版社兼書店は、1822年、国王献呈版として、オラース・ヴェルネ（1789-1863）による挿画5点を組み込んだ、美しいゴヌリュエ版を出版している⁽³¹⁾（図2・3）。戦争画、肖像画のほか、アラブの情景、聖書を題材にした作品を数多く残した画家オラース・ヴェルネについて、バルザックは『現代史の裏面』執筆中の1843年、ハンスカ夫人への書簡で触れており、この画家にハンスカ夫人の肖像画を描かせたいと思っていることを書き送っている。「ああ！ヴェルネがあなたの肖像を描きたいと思ってくれたら！ヴェルネは決して偉大な画家にはならないでしょう。彼はすべて持っています。色彩画家であり、デッサンし、構成し、手先の器用さを持ち合わせ、



図2

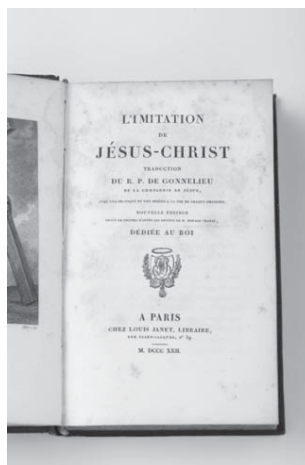


図3

ときおり感情に出会います。しかし彼は、これらの長所を作品の中で最高度に結合させる術を知りません。[…]とはいえ、オラース・ヴェルネはあなたの肖像をうまく描くことでしょう」(LH, 1843/1/22)。

この出版社兼書店の住所はサン＝ジャック通り59番地となっており（現在、59番地は存在しないが、57番地に古書店が入っており、当時の風景をしのばせる）、この位置関係は『現代史の裏面』でゴドフロワがラ・シャントリー夫人のために『キリストにならいて』を買いに行く書店の場所と一致している。

彼は、ラ・シャントリー夫人が毎晩一章ずつ読まなければならないことを考えて、『キリストにならいて』の美しい一冊を探すために部屋を出、階下に降りて通りに出た。どの場所に行こうか、どの書店で本を買おうかと迷い、取るべき道を決めかねて、入口のそばでしばらく立ち止まっていた。[…] 彼はサン＝ジャック通りのとある書店に行き、フランスで出版された『キリストにならいて』の中でもっとも美しい版の、非常に豪華な一冊を手に戻って来た。(CH, t. VIII, p. 247-248)

ゴドフロワは、ノートルダム大聖堂の北手、シャノワネス通りにあるラ・シャントリー夫人の館から、ノートルダム大聖堂前庭の広場を横切って橋を渡り、サン・ジャック通りへ向かう。本を入手し、夕食の時間に合わせて帰るが、ラ・シャントリー夫人にこの贅沢な本を差し出すと、「どうか、あなたが優雅なお心をお示しになるのもこれが最後となりますように」と優しくたしなめられる。

翌日から、ラ・シャントリー夫人たちが重要な打ち合わせをする午前と夕方の数時間、ゴドフロワは一人で部屋に閉じこもることになり、「あたかも本を一冊だけ与えられて牢獄に入れられた人が、その本を熱心に読むように」、『キリストにならいて』と向き合うようになる。

日曜日、ゴドフロワはラ・シャントリー夫人に腕を貸すためにミサに出かけるが、ミサの間、ニコラ氏、ジョゼフ氏、アラン氏の熱烈な信仰ぶりに気を取られて、誰のためにも祈らなかったことを夫人に見抜かれ、『キリストにならいて』第3巻 [sic] 第1章の「内なる交わりについて」(De la conversation intérieure)⁽³²⁾をじっくり読んで省察するように言いつけられる (p. 252)。実は、第3巻第1章は、「イエス・キリストと忠実な魂との内なる対話について」(De l'entretien intérieur de Jésus-Christ avec l'âme fidèle) であり、「内なる交わりについて」は第2巻第1章に入っており、バルザックがどちらを指示しようとしたのか定かでない。第2巻第1章「内なる交わりについて」では、「外的なものを軽んじ、内的なものに身を委ねることを学びなさい」、心の中に神のすまいを作りなさい、という教えがあり、第3巻第1章「キリストと忠実な魂との内なる対話」では、「外界で響く音ではなく、内面で教える真実を注意深く聞く耳は、まことに幸

いである。外界のものには閉ざされ、内的なもののためにのみ開く眼は幸いである」と言われ、また、ゴドフロワが初めてこの書を手にしたときに、自然とページが開き、目を走らせた「すべて、はかなく過ぎ行くものを捨て、永遠なるもののみを求めよ」という言葉もこの章に見出される。第2巻第1章も第3巻第1章も、ともに外的なものを捨て、内なるものに専心することを教えているが、第3巻のほうはラ・シャントリー夫人がとくに熱心に読んでいる章であるということ、バルザックが「永遠なるもののみを求めよ」という銘句にとくに注意を引かれたこと、さらにこの章は、バルザックが幼少期に慰めを見出した福音書「山上の説教」⁽³³⁾にあるように、「～は幸いなるかな」(Heureux ～)の形式を用いた文章でもあり、指示したかったのはたしかに「第3巻第1章」で、タイトルを書き違えたということなのかもしれない。この章タイトルの上に置かれた第3巻のタイトルが「*De la consolation intérieure*」であることも紛らわしく、これを「*conversation*」と取り違えたのだらうかとも思わせる(図1)。いずれにせよ、この場面で腹を立てたゴドフロワは、この章を読むどころか、子供じみた悪だくみにうつつを抜かすのであるが、夫人はゴドフロワに外的な好奇心を捨て、内面に沈潜することを説き勧めたかったのである。

4. バルザックにおける『キリストにならいて』と福音書

最後に、バルザックが『キリストにならいて』から汲み取っている思想、『キリストにならいて』が福音書と結び付けられて展開されている思想を見ておきたい。

・「孤独と沈黙」と「行動的祈り」

キリストとの内的交わり、内的対話は、ヘラルト・フローテや、彼の高弟によって創設された「共同生活兄弟会」の会員たちが専心し、希求したものであった⁽³⁴⁾。また、『キリストにならいて』では、内的生活を送り、魂を進歩向上させるために、「孤独と沈黙とを愛すべきこと」(1巻20章)が説かれていた。バルザックは、『祈祷論』を書いた二十歳頃からすでに、瞑想的祈りがもたらす霊的喜びを知っており、初期キリスト教の砂漠の隠修士⁽³⁵⁾が送った孤独の中での祈りの生活に憧れる一面を持っていた。1832年9月、バルザックはグランド・シャルトルーズ修道院を訪れ、雄大な風景と、独房の壁に刻まれた「*Fuge, late, tace*」(Fuis, cache-toi, tais-toi: 逃れよ、隠れよ、沈黙せよ)という銘句を見て、『田舎医者』を着想する⁽³⁶⁾。物語の中では、人生の過ちを償おうとする田舎医者ベナシスがグランド・シャルトルーズ修道院を訪れ、自分が憧れた生活の掟がこの三つのラテン語の単語に要約されていることを発見する。しかし、修道院の祈りの生活に「崇高な利己主義とでもいうべきもの」を感じとった彼は、貧しい村で医業を営み、村の福祉に力を尽くすことで、「行動的祈り」(prière active)を実践していくことを決心する(CH, t. IX, p. 573)。『現代史の裏面』でも、ラ・シャントリーの館は僧院にたとえられ、その住人たちは修

道者のような霊的読書と祈りの生活を送っているが、彼らの仕事はパリの悲惨を救うための慈善事業にあり、行動的祈りのもう一つの型が提示されている。彼らの「慰めの兄弟会」では、『キリストにならいて』が霊的修練の手引きとして読まれているが、と同時に、慈善事業の柱として据えられているのが福音書の教えである。

・福音書

『現代史の裏面』における行動的祈り、慈善事業を支えるのは、『キリストにならいて』と、福音書のペトロとパウロの教えである。ペトロとパウロの教えに入る前に、『キリストにならいて』そのものが福音書として捉えられていることを確認しておきたい。本書の魅力を述べる語り手は、次のように表現する。

ところで、『キリストにならいて』とその教義との関係は、行為と思想との関係に等しいが、この書に心奪われずにいることは不可能である。カトリック精神がそこで震動し、動き、人生と格闘し合っている。この本は信頼のおける友である。あらゆる情念、あらゆる困難、世俗的な困難にでさえ語りかけてくれる。どんな反論に対しても解決を与え、どんな説教師よりも雄弁である。なぜなら、その声はわれわれ自身の声であるから。その声はわれわれの心に立ち昇り、われわれは魂をとおしてその声を聞くのである。つまりそれは、あらゆる時代に適応され、あらゆる状況に重ね合わされ、翻訳された福音書である。(CH, t. VIII, p. 250)

『キリストにならいて』はここで、「行為」として、人生に直接働きかける生きた存在として、捉えられている。「その声はわれわれ自身の声である」としているのは、ときにグノースティックとも評されるバルザック独特の解釈とも言えるが、「われわれの心に立ち昇り」、魂に響く「声」との内的対話もたらすたしかな助言、十全な慰め、励ましが浮き彫りにされている。『キリストにならいて』第3巻と第4巻は、まさに読み手とキリストとの霊的対話の形式を取っており、魂に直接語りかける特別の魅力を持っている。あらゆる時代に適応し、読み手の状況に応じて語りかけるこの書が「福音書」と言われていることにも注目したい。ボシュエはこの書を「第5福音書」と呼んだというが⁽³⁷⁾、バルザックもこの書を「福音書」と捉え、正典の福音書と連動させているのである。

・〈愛徳〉：聖パウロの教え

正典の福音書から取り出され、『キリストにならいて』とともに「慰めの兄弟会」の原動力となっているのが聖パウロの「愛徳」(charité)の教えである。三つの対神徳と呼ばれる「信・望・愛」(foi, espérance, charité)の一つで、隣人のためにつとめる愛である。パウロは書簡の中で

繰り返し「愛徳」の教えに触れているが、中でも有名なのは「コリントの信徒への第一の書簡」13章である。「たとえ私が全財産を施そうとも、[...] 愛がなければ無に等しい。愛は忍耐強く、[...] 誇らず、高ぶらず、[...] 自分の利益を求めない [...]。[...] 信仰、希望、愛、この三つは、いつまでも残る。その中でもっとも偉大なものは、愛である」⁽³⁸⁾というものである。また、「コリントの信徒への第二の書簡」8章では、「あなた方は信仰、言葉、知識、熱意、私たちから受ける愛など、すべてにおいて豊かなのですから、この慈善の業においても豊かな者となりなさい。これはあなた方への命令ではありません。ただ、他者への心遣いによって、愛の真実さを試すために言うのです」とも述べている。

ゴドフロワは、ラ・シャントリー館の魂である『キリストにならいて』に親しむにつれ、「カトリックの〈愛徳〉から生まれた広大無辺の感情」と、こうした感情がもたらす甘美な喜びをおぼろながら感じ取るようになる。苦難に満ちた人生でありながら、諦めと優しさをたたえ、慈善事業に身を投じるラ・シャントリー夫人は「愛徳の生きた姿」(p. 319)であり、ゴドフロワは彼女を中心につながる崇高な友情を目の当たりにし、「1836年のパリに、真のカトリック信者、初代教会のキリスト教徒を見出したことに驚く」のであった (p. 250-251)。

ラ・シャントリー夫人は、ゴドフロワを兄弟会の一員にする準備として、「〈愛徳〉に関する聖パウロの書簡をしっかり読んで、熟知」することを申し付ける (p. 256)。つまり、『キリストにならいて』とともに、新約聖書も熟読することが促されているのである。夫人だけでなく、アラン老人も、入会を望むゴドフロワに対し、「さまざまな試験を受けなくてはなりません、まずは〈信じる〉ことです！ 信仰を持たない限り、〈愛徳〉に関する聖パウロの書簡の神的な意味を心と頭に吸収してしまわない限り、私たちの事業に参加することはできません」と告げる (p. 319)。アランは、さまざまな慈善や博愛が存在するが、自分たちが実行しているのは、「われわれの偉大で崇高な聖パウロが定義したとおりの愛徳」であり、「なぜなら、われわれは、愛徳だけがパリの傷口に包帯を巻くことができると考えているからです」と説明する (p. 324)。愛徳によって「傷口に包帯を巻く」という表現は、『村の司祭』の次の一節とも反響し合う。「おそらく私は、偉大な聖パウロがその愛すべき書簡の中で定義したような〈愛徳〉の神秘に苦悩をとおして参入し、人知れぬ土地の片隅で貧者の傷口に包帯を巻きたいと思ったのです」(CH, t. IX, p. 731)。また、『田舎医者』のベナシス医師は、「慰めの兄弟会」の人々にとってお手本として心に刻まれており、一地方を「荒れ果てた状態から繁栄の状態へ、無宗教の状態からカトリック信仰の状態へ、野蛮から文明へと移した」偉大な人物として言及され、パリの傷口はあまりに大きく、自分たちの力を越えているが、ベナシスが地方に及ぼしたような影響を、いつの日かパリに与えることができたら、というのがアランの切なる願いである。ゴドフロワは試験的に一つの仕事を与えられ、「人のために生きること」、5人の代表者として共同の活動に参加すること、「カトリックの美德から生まれた理想像の中でもっとも美しく、もっとも生き生きした〈愛徳〉を指

導者として仰ぐこと」の喜びを予感し、「これこそ生きるということだ！」と心の中で叫ぶ（CH, t. VIII, p. 329）。こうして、マルセル・ブトロンはこの書を「愛徳の福音書」l'« évangile de la charité »と呼び、「愛徳という、社会的な徳の中でも最上位にある、もっとも効果的で現代性のある美徳の栄光を描いた、真に福音書的な作品」を讃えるのである⁽³⁹⁾。

・TRANSIRE BENEFACIENDO：慈善事業へ

聖パウロの「愛徳」の実践を表す言葉が、「*Transire benefaciendo*」（善をなしつつ彼岸へ渡る）（CH, t. VIII, p. 278, 279, 323）であり、「慰めの兄弟会」のモットーとして用いられている。これは『使徒言行録』10章38節（t. VIII, p. 1384, note）に記された言葉で、カイサリアの百人隊長コルネリウスの家に招かれたペトロが、「イエスは、あまねく地方を巡って善を行い、悪魔に苦しめられている人々をみないやされた」（ウルガタ版では、「*Jesum [...] qui pertransivit benefaciendo*」）と語った言葉から取られている。アラン氏の部屋には、兄弟会のモットーとしてこの語が黒地に金文字で掲げられており（p. 278）、氏は起きたときも、寝るときも、着替えるときも、常にこの標語を胸に刻んでいるのであった。アラン氏によれば、「*transire benefaciendo*」とは、「善行の跡を一筋長く残して、この世の彼方に行くこと」を意味している（p. 323）。また、「少しでも傲慢な心が浮かべば、それはもはや「*transire benefaciendo*」ではなくなります」、「善を行うとき、すべての虚栄心、奢り、自尊心を捨て去り」、「もはや自身のことを考えずに」行動しなければなりません、と教える（p. 278-279）。「ああ！この標語を実行することがどれほど大きな喜びをもたらすか、ご存知だったら！」とアラン氏はいい、彼らの慈善事業の精神に激しく突き動かされ、この会の崇高な活動に与りたいと熱烈に望むようになるゴドフロワもまた、自室の寝台の前にこの言葉を掲げ、入会への一步を踏み出すのである（p. 324）。

おわりに：行動と瞑想

中世キリスト教の霊的革新運動の中で生まれた『キリストにならいて』は、16世紀の宗教改革期、イグナチオ・デ・ロヨラがフランシスコ・ザビエルら6人の同志とともに設立したイエズス会の精神的基盤として取り込まれた。1549年、ザビエルが日本にもたらしたのは、宗教改革の危機をとおして刷新された「新しい信心」のカトリシズムであった。

そして19世紀、革命後のフランスで新たなカトリックの姿を提示しようとしたバルザックが立ち返ったのも『キリストにならいて』であった。この書の精神を胸に『田舎医者』を生み出し、ハンスカ夫人と交わしたこの書をめぐる交流にも後押しされて、19世紀パリにおける「新しい信心」の形を『現代史の裏面』に結実させたのである。フローテと共同生活兄弟会の会員たちが、祈りと霊的読書、自己鍛錬の生活を送りつつ、使徒パウロを模範として労働に従事し、福音的生活を实践したように⁽⁴⁰⁾、「慰めの兄弟会」の会員たちはたしかに、霊的読書と瞑想と祈りの共同

生活を送りつつ、福音書の愛徳と善行の教えをパリの不幸を相手に実践しているのであった。

行動と瞑想——この二つは、キリスト教の二つの側面であり、また一人の人間の二つのあり方でもあり、ともに本質的な二要素である。キリストを家に迎え、もてなしのために忙しく立ち働くマルタと、キリストの足元に座りその言葉に聴き入るマリア⁽⁴¹⁾が、キリストにとってともに不可欠で、切り離せない存在であったように。

*本論は、拙著 *Séraphita et la Bible : Sources scripturaires du mysticisme balzacien*, Paris, Honoré Champion, collection « Romantisme et modernités », n° 136, 2012の一部 (p. 210-215) を発展させたものである。

注

- (1) 各巻はもともと独立して書かれたものだが、柀源一氏や松岡洸司氏が指摘するとおり、第1巻「浄化の道」、第2巻「照明の道」、第3巻「神との一致の道」、第4巻「御聖体の道」という、完徳にいたる一連の流れとして捉えることもできる。新村出、柀源一校註『吉利支丹文学集 I』p. 164. 松岡洸司『コンテムツスマンヂ研究—翻訳における語彙の考察—』p. 18.
- (2) 『キリストにならいて』をめぐる参照した資料は、文末の参考文献にまとめた。
- (3) 小島幸枝『コンテムツスマンヂの研究 研究篇』p. 11. *Édition et diffusion de l'Imitation de Jésus-Christ (1470-1800)*, p. 157.
- (4) *Grand Dictionnaire universel du XIX^e siècle*, « Imitation de Jésus-Christ ».
- (5) Jules Michelet, *Histoire de France*, « Préface de 1869 », dans *Œuvres complètes*, t. IV, Flammarion, p. 22 ; citée par Henri de Lubac, *La Postérité spirituelle de Joachim de Flore*, t. II, p. 230. Voir aussi Michelet, *Œuvres complètes*, t. VI, *Histoire de France*, Livre X, chap. 1^{er}, p. 41.
- (6) *L'Imitation de Jésus-Christ*, traduite par P. Corneille, 1658, « Au lecteur », p. 3.
- (7) *De l'Imitation de Jésus-Christ*, par le Sieur De Beül (pseud.), 1662, « Avertissement, où il est parlé de l'excellence, et de l'auteur de ce livre », p. 25-26.
- (8) *Lettres à Madame Hanska (LHと略)*, 20/5/1838 et note par Roger Pierrot, p. 453. ロジェ・ピエロは、この作品とはおそらく『修道女マリー・デ・ザンジュ』か『アルベール・サヴァリユス』だろうとしている。
- (9) *L'Envers de l'histoire contemporaine, La Comédie humaine (CHと略)*, t. VIII, p. 250.
- (10) 新村出、柀源一校註『吉利支丹文学集 I』p. 161-162. 小島幸枝『コンテムツスマンヂの研究 研究篇』p. 20-30, 57. 『日本キリスト教歴史大事典』p. 136 (海老沢有道『イミタチオ・クリスティ』).
- (11) Jules Michelet, *Histoire de France* (Livre X), t. III, dans *Œuvres complètes*, t. VI, Flammarion, 1978, p. 40.
- (12) また、『キリストにならいて』には次のような一節がある。「著者の権威や、彼が学識のある人であったかどうかなど気にかけないよう。[...] 誰がそう言ったかを尋ねるのではなく、何が言われているかに注意なさい」(第1巻第5章「聖書を読むことについて」)。この言葉はしばしば、文脈を離れて、著者を詮索することへの戒めのように受け止められてきた (Brian McNeil, *De « L'Imitation de Jésus-Christ »*, p. 32. 小島幸枝『コンテムツスマンヂの研究 研究篇』p. 30)。
- (13) 新村出、柀源一校註『吉利支丹文学集 I』p. 22.
- (14) 新村出、柀源一校註『吉利支丹文学集 I』p. 102, 161.
- (15) 尾原悟編『コンテムツスマンヂ』p. 295.
- (16) 海老沢有道「イミタチオ・クリスティ和訳史ノート」p. 20.

- (17) *Ibid.*
- (18) 新村出、終源一校註『吉利支丹文学集 I』 p. 33, 87-93, 102, 161-172. 小島幸枝『コンテムツスムンヂの研究 研究篇』 p. 11-30.
- (19) 尾原悟編『コンテムツスムンヂ』 p. 297-298. 小島幸枝『コンテムツスムンヂの研究 研究篇』 p. 13, 16, 514. 東洋文庫特別展示「マリー・アントワネットと東洋の貴婦人—キリスト教文化をつうじた東西の出会い」(2013年3月20日～7月28日)でも、細川ガラシャの愛読書として展示されていた。
- (20) 海老沢有道「イミタチオ・クリスティ和訳史ノート」 p. 29-31. 尾原悟編『コンテムツスムンヂ』 p. 291-292. 小島幸枝『コンテムツスムンヂの研究 研究篇』 p. 11. タイトルは、『基督之模範』(桜井近子訳、1892)、『聖範』(フォス訳、1915)、『イミターシヨ・クリスチ 基督のまねび』(内村達三郎訳、1928)、『キリストにならう』(バルバロ訳、1992 [1953年版改訂])等さまざまであるが、本論では、論者が親しんできた大沢章・呉茂一による岩波文庫版(1960)から『キリストにならいて』とした。
- (21) 『キリストにならいて』はこの世を厭うことを教えるが、終源一氏が指摘するとおり、「それは決して単なる消極的な厭世ではない。より高次なものに達するために、世を厭ふのである」(『吉利支丹文学集 I』 p. 163)。
- (22) 以下、『キリストにならいて』引用箇所の翻訳にあたっては、文末の参考文献に記したラテン語、仏訳、和訳各版を参照した。
- (23) *L'Envers de l'histoire contemporaine*, CH, t. VIII, p. 1375, note 3.
- (24) *Autre étude de femmes*, CH, t. III, p. 716.
- (25) *La Cousine Bette*, CH, t. VII, p. 203.
- (26) *Les Petits Bourgeois*, CH, t. VIII, p. 163, 166.
- (27) Marcel Bouteron, « *L'Envers de l'histoire contemporaine et Les Frères de la Consolation* », p. 217.
- (28) *Splendeurs et misères des courtisanes*, « préface de la première édition », CH, t. VI, p. 426.
- (29) *L'Envers de l'histoire contemporaine*, « Introduction » par Jeannine Guichardet, CH, t. VIII, p. 196, 200-202.
- (30) Lettre à Zulma Carraud, 1833/9/2, *Correspondance*, t. I, p. 838. Mireille Labouret が『キリストにならいて』と『田舎医者』の関連を考察している(文末参考文献参照)。
- (31) ヴェルネの挿絵を挟んだエディションは、1818年、フランソワ・ジャネ(ラ・アルブ通り)によって出版され、1821年に息子ルイ・ジャネ(サン＝ジャック通り)に引き継がれたらしい。1821年版は粗末な作りであったが、1822年版では豪華になり、丁寧な校正による若干の修正が施されている。
- (32) « conversation » は、内容から見て、「会話」ではなく、ラテン語 « *conversatio* » 「交わり」の意味がふさわしい。
- (33) マタイ V, 1-12 ; ルカ VI, 20-23.
- (34) 小島幸枝『コンテムツスムンヂの研究 研究篇』 p. 22-24.
- (35) Balzac, *Traité de la prière*, in *Œuvres diverses*, t. I, p. 607.
- (36) *Le Médecin de campagne*, CH, t. IX, p. 1397, « Histoire du texte ».
- (37) Brian McNeil, *De « L'Imitation de Jésus-Christ »*, p. 11.
- (38) 聖書引用の翻訳にあたっては、参考文献に記した各版を参照した。
- (39) Marcel Bouteron, « *L'Envers de l'histoire contemporaine et Les Frères de la Consolation* », p. 217.
- (40) 『新カトリック大事典』(鈴木宣明「デヴォティオ・モデルナ」、「フローテ」)、五野井隆史「『イミタチオ・クリスティ』から『こんてむつすむん地』まで」 p. 6.
- (41) ルカ X, 38-42.

参考文献

【バルザック】

- BALZAC, Honoré de, *La Comédie humaine (CH)*, 12 vol., Gallimard, « Bibl. de la Pléiade », 1976-1981.
- *Traité de la prière, Œuvres diverses*, t. I, Gallimard, « Bibl. de la Pléiade », 1990.
- *Lettres à Madame Hanska (LH)*, t. I (1832-1844), t. II (1845-1850), édition établie par Roger Pierrot, Robert Laffont, « Bouquins », 1990.
- *Correspondance*, tome I (1809-1835), édition établie, présentée et augmentée par Roger Pierrot et Hervé Yon, Gallimard, « Bibl. de la Pléiade », 2006.
- 『バルザック全集』全26巻、東京創元社、1973-1976.
- ・第5巻『現代史の裏面』水野亮訳、1973.
 - ・第4巻『田舎医者』新庄嘉章、平岡篤頼訳、1973.
- BOUTERON, Marcel, « *L'Envers de l'histoire contemporaine et Les Frères de la Consolation* », *Études balzacien-nes*, Jouve, 1954.
- LABOURET, Mireille, « *De l'Imitation de Jésus-Christ à "l'Évangile en action"* : images et paraboles dans *Le Médecin de campagne* », *AB*, 2003, p. 43-62.
- « *L'Évangile en action : imitation et création dans Le Médecin de campagne* », *Bible et littérature*, études réunies et présentées par Olivier Millet, Honoré Champion, 2003, p. 183-198.

【『キリストにならいて』】

- L'Imitation de Jésus-Christ*, traduite et paraphrasée en vers français, par P. Corneille, Rouen, L. Maurry ; Paris, R. Ballard, 1658 (1^{re} éd. : Rouen, 1651-1656).
- (*De* —), trad. nouvelle, par le Sieur De Beuïl [Lemaistre de Sacy], Prieur de S. Val, 3^e éd., Ch. Savreux, 1662 (1^{re} éd. : en même année).
- traduction du R. P. de Gonnellieu, de la Compagnie de Jésus, avec une pratique et une prière à la fin de chaque chapitre, nouvelle édition, ornée de figures d'après les dessins de M. Horace Vernet, dédiée au Roi, Louis Janet, 1822 (1^{re} éd. : 1712).
- trad. nouvelle, par le Père Lallemand, de la Compagnie de Jésus, J.-B. Coignard, 1740.
- (*De* —), trad. nouvelle [par J.-B.-Modeste Gence], Treuttel et Würtz, 1820.
- trad. nouvelle, par E. Genoude, Librairie grecque-latine-allemande, 1820.
- trad. nouvelle, par M. l'abbé F. de La Mennais, Librairie classique-élémentaire, 1824 ; trad. de Lamennais, Éditions du Seuil, coll. Points Sagesses, 2005.
- traduction nouvelle par Fabius Henrion, avec texte latin, manuscrit de Thomas a Kempis, Tours, Mame, 1935.
- Édition et diffusion de l'Imitation de Jésus-Christ (1470-1800)* [Études et catalogue collectif], sous la direction de Martine Delaveau et Yann Sordet, Bibliothèque nationale de France, Bibliothèque Mazarine, Bibliothèque Sainte-Geneviève, 2011.
- AMPE, Albert, S.J., *L'Imitation de Jésus-Christ et son auteur*, Roma, Edizioni di Storia e Letteratura, 1973.
- BACKER, Augustin de, le R. P. de la Compagnie de Jésus, *Essai bibliographique sur le livre De Imitatione Christi*, Amsterdam, P. Schippers, 1966 (1^{re} éd. : Liège, L. Grandmont-Donders, 1864).
- LAROUSSE, Pierre, *Grand Dictionnaire universel du XIX^e siècle*, Paris, 1866-1879 ; Genève, Slatkine Reprints, 1982.
- « *Imitation de Jésus-Christ* ».
- LUBAC, Henri de, *La postérité spirituelle de Joachim de Flore*, tome I. de Joachim à Schelling ; tome II. de Saint-

Simon à nos jours, P. Lethielleux, 1978-1980.

MCNEIL, Brian, *De « L'imitation de Jésus-Christ »*, postface de G. Épiney-Burgard, traduit de l'anglais par Éliane Utudjian Saint-André, Les Editions du Cerf, 2002.

MICHELET, Jules, *Œuvres complètes*, t. IV, VI : *Histoire de France*, t. I (Livres I-IV), t. III (Livres X-XVII), éditées par Paul Viallaneix, Flammarion, 1974, 1978.

『新カトリック大事典』、上智学院新カトリック大事典編纂委員会編集、研究社、1996-2009、全4巻（P. ネメシエギ『『イミタティオ・クリスティ』』／鈴木宣明「デヴォティオ・モデルナ」、「トマス・ア・ケンピス」、「フローテ」）。

『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988（海老沢有道「イミタティオ・クリスティ」）。

H. チースリク「キリシタン書とその思想」、『キリシタン書、排耶書』〈日本思想体系〉、岩波書店、1970、p. 551-592.

海老沢有道「キリシタン宗門の伝来」、『キリシタン書、排耶書』〈日本思想体系〉、岩波書店、1970、p. 515-550.

——「イミタチオ・クリスティ和訳史ノート」、『キリスト教史学』第33集、1979年9月、p. 19-31.

大沢章・呉茂一訳『キリストにならいて』岩波文庫、2012、40刷（初刷1960）。

尾原悟編『コンテムツスムンヂ（キリシタン文学双書）』教文館、2002.

小島幸枝『コンテムツスムンヂの研究 研究篇／資料篇』武蔵野書院、2009.

五野井隆史「『イミタティオ・クリスティ』から『こんでむつすむん地』まで—*De Imitatione Christi*（『キリストに倣いて』）とイエズス会と日本のキリシタン」、『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第9号、2008、p. 1-15.

新村出、柗源一校註『吉利支丹文学集 I』平凡社、東洋文庫、1993（初版：朝日新聞社、1957）。

田辺保『ボースで死ぬということ 〈中世の秋〉の一風景』みすず書房、1996.

松岡洗司『コンテムツ・ムンヂ研究—翻訳における語彙の考察—』ゆまに書房、1993.

【聖書】

Biblia Sacra, Vulgatæ editionis, Sixti V et Clementis VIII, Pont. Max. jussu recognita atque edita, Lyon, Pèrisse frères, 1826.

Biblia Sacra Vulgata, éd. par Robert Weber / Roger Gryson, Stuttgart, Deutsche Bibelgesellschaft, 1969, 2007.

La Bible, traduction de Louis-Isaac Lemaître de Sacy, préface et textes d'introduction établis par Philippe Sellier, Robert Laffont, « Bouquins », 1990.

フェデリコ・バルバロ訳『聖書』、講談社、1996（講談社版初版1980）。

新共同訳『聖書』、日本聖書協会、2009（初版1987）。